

蝶の博物詩

生態42

季節型(2)



サカハチチョウ 夏型
(1998年8月6日 黒姫山)

photo by

Nishiyama



サカハチチョウ 春型
(1996年6月2日 黒姫山)

蝶の博物詩

生態42

季節型(2)

冬になると褐色の体毛が白くなる動物にはライチョウのほかエチゴウサギがいる。“大きな袋を肩にかけ、大黒様が来かかると、ここに因幡の白うさぎ、皮をむかれて赤裸”の童謡に出てくる野ウサギである。メロディーは単調で、童謡というよりは童話に近く、絵本があったように思う。白いウサギが多数のワニの背を跳んで、海を渡っている挿絵があったようだ。因幡の海にワニがいるはずがないと思ったが、その地方ではサメをワニザメと呼んでいたことはのちに知った。だましたワニに皮をむかれた赤裸の白ウサギは“大黒様のいうとおり、きれいな水に身を洗い、ガマの穂綿にくるまれば”表皮剥離が治ったという話である。

閑話、蛇足がいささか長すぎたが、ライチョウ、エチゴウサギの冬期の白化は周囲の環境、背景に対する保護、隠蔽効果であり、蝶の季節型とは異なる。これらは一世代の個体における問題であるが、1年の間に二世代以上繰り返すある種の蝶では成虫の出現時期によって、春型、夏型、または秋型と呼び、季節型(季節の変異)と総括されている。

日本産の蝶の中には1年のある期間に1回のみ発生するものがある。初春だけに出現し、spring ephemeralと呼ばれるギフチョウや初夏に羽化し、空飛ぶ宝石といわれるミドリシジミ類、さらには国蝶に指定されるオオムラサキなどは、時季を失すると、もう1年待たないと逢えない。年々日本の蝶が著しく減少している現在、惜別の情はひとしおである。

一方、本邦の蝶、蛾には季節の変異のある種が多く、春型、夏型の鑑別ができると、楽しみも少なくない。たとえば、ミヤマカラスアゲハの春型は小型ではあるものの、とくに雄蝶の美しさは別格で、女性の間で人気が高い。ごく普通のナミアゲハやモンシロチョウなどでも春、夏型の間に大きさ、色調、模様の違いがあって面白い。

サカハチチョウは季節型の違いの明瞭な蝶の代表で、まるで別種のように見える。関東地方では市街地にはまったく見られず、低山地の山道に入ると真っ先に出迎えてくれるのがこの蝶である。春型は橙色と黒色の斑模様が目立つが、夏型は翅の中央部に白帯が斜に走る。この白帯の形が逆八の字であることからサカハチチョウと名づけられた(本誌22巻6号)。

北海道にはアカマダラ(本誌36巻2号)といい、ちょうどサカハチチョウを小型にしたような蝶が生息しており、やはり春、夏型の2つの季節型を示す。この蝶の名前は橙色(赤)と黒のまだら模様を示す春型の特徴から命名されている。

実に余談であるが、鳥取市の白兔神社は因幡の白ウサギを主祭神とし、皮膚病や熱傷に霊験があるとのこと。近くにはキマダラルリツバメという美しい蝶の生息地もある。

西山茂夫